

introduction

医療の進歩に伴い、医療のあらゆる領域で専門の細分化が進んでいます。しかし、どの領域の専門家であっても、医師としてプライマリ・ケアに対応する基本的な知識を備えることが求められます。

骨・軟部腫瘍や骨転移は、症状や所見が他の整形外科疾患と類似していることがあり、「見逃される」あるいは「間違えられる」リスクがあります。一般整形外科医には、腫瘍診療に関与しなくてよいという誤解が根強いものの、実際には日常の診療のなかで、これらの病態と遭遇する機会は少なくありません。骨・軟部腫瘍、骨転移に関する基礎的な知識をもち、適切な診断法を理解することが、腫瘍専門医との橋渡し役としての役割を果たすためには欠かせません。早期に専門的な治療へと繋ぐことによって、患者の運命は大きく変わることがあるのです。

骨・軟部腫瘍の治療が、切断から患肢温存に変化し、化学療法によって治療成績が向上してきたように、現在も骨・軟部腫瘍の診療は刻々と変化しています。また、がん＝悪性腫瘍全体の治療成績の向上に伴って骨転移が増加し、かつ生存期間も長期化しています。

骨・軟部肉腫が年間 4,000 例程度なのに対し、骨転移は年間 10 万例を超えています。骨・軟部腫瘍専門医は整形外科全体のわずか 1% しかおらず、脊髄麻痺や病的骨折を含む骨転移の管理をすべて受け止めることは現実的ではありません。もはや、骨転移は骨・軟部腫瘍専門医ではなく、脊椎外科医や外傷外科医をはじめとした整形外科医全体で対応する領域となっています。

がん時代を迎え、運動器にできる腫瘍を対象とした orthopaedic oncology (骨軟部腫瘍学) に加えて、これからは骨転移を含む「がん患者に生じる運動器の問題」に対応する onco-orthopaedics (腫瘍整形外科学) の発想と取り組みが求められています。

本特集では、特殊領域と思われがちな「骨・軟部腫瘍」そして「骨転移」に関して、腫瘍が専門ではない一般整形外科医を対象に、日常診療で知っておくべき診断と治療のポイント、そして最新の動向を第一線の先生方にまとめていただきました。本特集が皆さまの骨・軟部腫瘍と骨転移の診療の一助となることを願っています。

帝京大学整形外科
河野博隆